

東京五輪でようやく

柔道は復活した

火箱 芳文 陸自74

はじめに

東京五輪は開催すら危ぶまれた時期もあったが、7月21日から新型コロナウイルスナウイルス禍が拡大する中で開催され8月8日熱戦に幕を閉じた。

開催国で置き換わりが進むデルタ株の猛威に医療の逼迫を心配する声が上がるとは当然であるが、始まる前にこのコロナ禍への真摯な懸念に乗じる形で、執拗に五輪中止を叫ぶ政党、マスコミ、それを支持する国民の声があったことは甚だ遺憾であった。これは日本社会に蔓延した悪意であり、その矛先は五輪やスポーツそのものにまで及びそうしてついに選手個人にまで対象が広がっていった。このことが開催に向け準備をしている国、東京都、組織委員会など大会関係者の気持ちをどれだけ委縮させ、また人生をかけて努力してきた五輪出場選手の気持ちを踏みにじったことか。例えば体操の内村選手の発言に「選手のエゴだ」と

批判が集中したり、また厳しい闘病

上げたい。

と過酷なりハビリで白血病を克服した水泳の池江選手に対する五輪出場切符返上要請など、日本人としての思いやり、やさしさは微塵もなく日本の病巣もここまで広がっているかと思ひ、正直悲しくなった。

しかしほとんどが無観客の開催とはなつたが、五輪が始まれば大多数の国民はテレビにくぎ付けになり、世界の一流選手の速さ、強さ、妙技に感動し、日本選手の活躍に声援を送つた。この手のひらを返したようなマスコミの報道姿勢には呆れたが、五輪を日本で開催してよかつたと思ふ。このコロナ禍の中でさうと心底思う。このコロナ禍の中でさえ開催した日本の責任感、企画力、規律性、安定性は全世界に伝わつたと思ふ。歴史が判定すると思ふが開催したことは日本人として大いに誇るべきだ。

地元開催という好条件も重なつたが、日本はメダル数で合計58個を獲得し、米国、中国に次いで3番目、金メダルの数では27個と五輪史上最大の成果を収めた。選手の皆さんや大会関係者には最大の賛辞を贈るとともに、久しぶりに感動や日本人の一体感を感じることができ感謝申し

東京五輪での日本柔道の成績

その中で開始早々に始まつた柔道の躍進は目を見張るものがあり、獲得したメダルは男女混合団体を含め併せて金9個、銀2個、銅1個の12個のメダルを獲得する素晴らしい成果を上げた。この先勝が他競技へ波及し五輪史上最大のメダルの獲得につながつたものと思ふ。子供の頃に柔道を習い始め、柔道によって育てられた思いがある筆者として、また全柔連の理事（現在は特別顧問）として、柔道の復活は嬉しい限りである。また何よりも自衛隊の濱田尚里選手が個人女子78キ級で金メダル、男女混合団体で銀メダルを獲得したことは二重の喜びであった。自衛隊の柔道で初の快挙であり、自衛官の活躍は何よりも誇らしい。

柔道は前回のリオ五輪では金3個、銀1個、銅8個であり、前々回のロンドンに比べ大きく復活したが更に今回は金メダルの獲得数という点で大きく上回つた。今までの五輪での日本選手団の獲得したメダルの内20%は柔道競技によるもので、金メダルでは実に33%に及んでいる。

見事な活躍であつたが、残念なことがある。それは男子100キ超級

での金メダルはまたしても今回の五輪でも取れなかつたことと、初種目の男女混合団体でフランスに負け銀メダルに終わったことである。柔道は日本で生まれた競技ゆえ常勝は当然と言ふ意見の方もおられるかも知れないが、今や柔道はアジアは勿論ヨーロッパ、パンアメリカン、オセアニア、アフリカなど全世界に広がっており国際競技化した中では思ふような成績を収められない時もあった。

柔道の歴史

柔道の創始者は嘉納治五郎である。柔道・スポーツ・教育分野の発展や日本のオリンピックへの初参加への尽力など、明治から昭和にかけて日本におけるスポーツの道を開いた。「柔道の父」「日本の体育の父」とも呼ばれている。嘉納は兵庫県神戸市の酒造・廻船業を営む名家に生まれ、1874年官立東京開成学校（後の東京大学）に進学、政治学、理財学を学ぶ傍ら、体格に恵まれな

い嘉納は天神真揚流と起倒流という二つの柔術の修行に没頭し起倒流で

は免許皆伝の腕前になる。卒業後、

柔術の各流派の技術を集大成し、崩しの理論などを確立し、柔術が時代に受け入れられるように、独自の「柔道」を作り上げ1882年講道館を設立する。設立後は四天王と呼ばれる弟子たちとともに柔術の奥義を研究し、力学と言う学問の観点から柔道の研究に明け暮れ、講道館柔道の特色の一つである「くずし」を会得した。体格の劣るものでも大きなものを投げられる、まさに「柔よく剛を制する」「小よく大を制する」ためには修得すべき必須の極意である。後に柔道修行の目的は①勝負法(武術/真剣勝負/護身)、体育法(体育)、修心法(知徳育/応用)と定義し、体系化した。また「柔道は心身の力を最も有効に使用する道である。その修行は攻撃防禦の練習によって身體精神を鍛練修養し、斯道の神髓を體得する事である。さうして是によって己を完成し世を補益するが柔道修行の究竟の目的である」との考えを示し、更に柔道の理念を發展させ「精力善用」「自他共栄」「己達成(おのれをつくしてなるをまつ)」「など名言を残し体の鍛錬のみでなく、礼儀正しき、他者への思い

やりなど人格形成に役立つ教育的価値を加えた柔道を内外に普及しようとした。弟子たちとともに国内の反対意見を克服し警視庁を皮切りに海軍、大学などに普及していった。海外では学習院の教頭の頃自ら普及活動に努め、更に実力者の弟子たちを米国、ヨーロッパ、南米ブラジルなどに派遣し普及に当たらせた。柔道が海外でも少し知られるようになる

と、来日する各国の大使、公使、軍人らが講道館柔道を見学するようになる。1893年(明治26)には講道館にイギリス人が入門、次いで米国、インド、中国、フランス、カナダと言った国の人々が講道館の門を叩くようになり、門下生が母国に帰ってからも柔道に取り組み世界中に普及していったと考えられる。一方で嘉納は柔道の精神を他国の文化の中でもうまく伝えることができるのかという悩みを抱えていた。勝敗に拘り強さだけを求めるのではなく、相手を敬い、感謝することで助け合う心を育み、自分と他人が共に良い世の中にしようとする「自他共栄」の精神こそが嘉納の目指す柔道だった。「技」の鍛錬だけでなく「形」も重視し心身の鍛錬、「礼」の大切

さを教えている。

嘉納は教育者として学習院教頭、東京師範学校(現在の筑波大学)校長を務め、武術に教育的価値を見出し整備した武道のパイオニアであり、更に日本のスポーツの道を開き東洋初のIOC(国際オリンピック委員会)委員、日本スポーツ協会会長を務め1940年(昭和15)の東京オリンピックの招致に成功している(支那事変の激化のため返上)。

こうして柔道は世界に広がっていったが日本では戦前は講道館が1930年から1941年まで、無差別級の日本一の柔道選手を目指す大会として全日本柔道選手権を開催、戦後は1948年から新たに無差別級の日本一を決定する大会として全日本柔道選手権大会を毎年開催し多くの優れた柔道家を輩出していた。

戦後ヨーロッパ各国では急激に柔道人口が増え、老舗のイギリスやフランスばかりでなく各国に柔道連盟が組織されていた。1948年4カ国で結成されたヨーロッパ柔道連合は1951年国際柔道連盟に改組され第1回ヨーロッパ選手権大会が開催された。これに比べ日本は敗戦

により大日本武徳会がGHQにより解散させられ、武道が禁止指令を受けており、ようやく学校教育で柔道を教えることが許され、全日本柔道連盟が結成されたばかりであった。しかしながら1952年の国際柔道連盟の総会で日本の加盟が認められ、五大陸を束ねる形で国際柔道連盟が改組された。会長には講道館長、全日本柔道連盟会長が就くが事務局長はフランス人であった。この結果、国際柔道連盟本部は東京講道館に置かれ、事務局はパリに置かれるというちぐはぐな体制で柔道の国際化が始まった。これから柔道は講道館ではなく国際柔道連盟が主導し、体重別制、段位授与、女性の競技参加、審判規定などの面で講道館柔道とは違ったヨーロッパ主動で柔道そのものを武道から競技スポーツへ本質的に変質させていくのである。当時の講道館は国際化とともに当然起こってくる競技としての「JUDO」

に対しての対応が遅れ家元意識の上に胡坐をかき国際化の波に乗り遅れていた。柔道の変質はまさに柔道発祥の地である日本の柔道連盟が、国際的な発言権を喪失していく過程と軌を一にしている。

日本柔道の五輪の歴史

その国際的流れの中で日本の柔道の前に立ちほだかつた男がオランダのアントン・ヘーシンクである。彼は1961年パリの世界選手権で圧倒的な強さで日本選手権者の曾根六段を倒し優勝するのである。1964年の柔道競技が正式種目となった東京五輪においても無差別級決勝で神永五段を破り金メダルを獲得する。この時軽量級では中谷雄英選手、中量級では岡野功選手、重量級では猪熊功選手が金メダルを獲得していたが、パリの世界選手権でヘーシンクに敗れた、日本柔道にとって無差別級の勝者こそ真の覇者、この階級で負ければ何の意味もないに等しく、日本柔道に与えたショックは図り知れないものがあつた。

その後柔道はメキシコ五輪では実施されなかつたものの、1972年のミュンヘン五輪で再び採用され、以降毎回五輪では実施されている。女子は1988年のソウル五輪で公開競技で初めて実施され、1992年バルセロナ五輪で正式種目として採用されている。

1964年の東京五輪では4階級、その後階級が増加、1988年

ソウル五輪から男女7階級で実施されている。ただし同一階級はあるものの選手の大型化が進み体重制限の上限が大きくなっている。また1984年のロス五輪までは無差別級があつたが、1988年のソウルでは無差別級は廃止され95^キ超級となる。日本は1964年東京五輪の無差別級で金メダルを取らず、1972年のミュンヘン五輪では3階級で金メダルを獲得するものの無差別級ではまたしても金メダルは取れなかつた。重量級の選手の育成が課題であつた。その課題を克服し悲願であつた無差別級・重量級で金メダルを獲得したのがモントリオール五輪、ロス五輪での無差別級の上村選手、山下選手、ソウル五輪での95^キ超級の斎藤選手であつた。この3大会で悲願を達成した。しかしながらそれ以降は最重量級の選手でバルセロナ、アトランタ、シドニーと金メダルは取れていない。ようやくアテネ五輪、北京五輪で鈴木選手、石井選手が金メダルを獲得し復活を印象づけたが、またしてもロンドン、リオ、今回の東京と最重量級は金メダルを逸している。フランスの巨人リ

オウル五輪から男女7階級で実施されている。ただし同一階級はあるものの選手の大型化が進み体重制限の上限が大きくなっている。また1984年のロス五輪までは無差別級があつたが、1988年のソウルでは無差別級は廃止され95^キ超級となる。日本は1964年東京五輪の無差別級で金メダルを取らず、1972年のミュンヘン五輪では3階級で金メダルを獲得するものの無差別級ではまたしても金メダルは取れなかつた。重量級の選手の育成が課題であつた。その課題を克服し悲願であつた無差別級・重量級で金メダルを獲得したのがモントリオール五輪、ロス五輪での無差別級の上村選手、山下選手、ソウル五輪での95^キ超級の斎藤選手であつた。この3大会で悲願を達成した。しかしながらそれ以降は最重量級の選手でバルセロナ、アトランタ、シドニーと金メダルは取れていない。ようやくアテネ五輪、北京五輪で鈴木選手、石井選手が金メダルを獲得し復活を印象づけたが、またしてもロンドン、リオ、今回の東京と最重量級は金メダルを逸している。フランスの巨人リ

覇し今回も日本の原沢選手を下して銅メダルを獲得している。パリ大会に向けての大きな課題が残つている。階級制が導入されて以降軽重量級以下の選手の活躍はロサンゼルスまでは安定していたが、ソウル以降60^キ級の野村選手のオリンピック3連覇の偉業はあるもののヨーロッパ、ロシア、韓国などの台頭によりアトランタでは必ずしも振るわなかつた。その後シドニー、アテネと復活する。特にアテネでは金メダル8個を含む10個のメダルを獲得したが次の北京、ロンドンでは著しく低迷する。ロンドンに至つては男子の金メダルは0、女子は松本選手の1個と言う惨敗であつた。全柔連はこの惨敗を糧に強化に乗り出す。山下強化委員長のもと監督コーチ一丸となつて強化に乗り出す。その結果リオでは金メダルの数こそ男女3個であつたがメダル合計数は史上最多の11個とロンドンに比し大きく躍進した。その基盤のもと東京大会では金メダル9個を含むメダル12個の驚異的な成績を取めたのである。

上村講道館長、山下全柔連会長の理事の就任が大きい。この理事会で日本の正しい柔道への回帰が叫ばれ、審判規定、審判要領の変更がなされたことである。正しく組み、攻撃を受けなければ指導を受け、3回指導を受けると負ける。勝負が時間内に決着しなければゴールデンタイムで技あり以上のポイントがつくまで勝負を継続する方式にしたことである。従来施行されてきたレスリングのタックルのような技は反則とされ、上衣をもつての投げ技によって勝負を決定するよう日本の本来の柔道が目指すところにルール変更がなされたことが大きい。二つ目は金野強化委員長のもと井上、増地監督以下分析班が外国選手の映像を撮影し、個人の選手の特徴を把握、分析を行い日本の強化指定選手に対し職域を超えてチームジャパンとして徹底的に指導し強化を図つてきたことである。この指導する体制が確立してきたからこそ今回の成果になつた。三つ目は男子では73^キの大野選手、女子の78^キの濱田選手のような精力善用、自他共栄の柔道精神を体現する選手が多く育ち柔道界を牽引していることである。

東京大会の躍進の要因

躍進の要因は第一にIJFへの

最後に

一時期見られた、試合終了後に礼もせず試合場を後にする選手、派手なガッツポーズを見せ試合場を駆け巡る選手は見かけなくなり、ルール改正により、レスリングにおけるポイント制のようなJUDO化から「礼に始まり礼によつて終わる」美しい日本柔道への回帰がなされてきており喜ばしい限りである。

パリ大会ではこの状況を更に向上市させるため、より一層の強化に努め、男子最重量級（無差別級）や男女混合団体の金メダルを獲得してもらいたい。同時に今回の日本の柔道のすばらしさを観戦した児童、青少年が一人でも多く柔道の門を叩いてくれるよう切に願ひ、更なる日本柔道の発展を心から祈念する。